目　次

〈シリーズ総説〉
世界戦争への道、そして「現代」の胎動……山室信一　1
はじめに――「奇異の時代」二〇世紀の幕開け　1
一　本論集の課題　4
二　「第一次世界大戦」とはいかなる戦争か　7
三　情報伝達と戦争の世界化　12
四　第一次世界大戦への道　16
おわりに――「群衆心理の時代」としての「現代」へ　26

I　総　説

1　ヨーロッパ戦線と世界への波及……小関　隆／平野千果子　31
はじめに――サライェヴォ事件の前提　31
一　ヨーロッパ戦争への経緯　33
二　ヨーロッパの戦線　37
三　ヨーロッパ戦争から世界戦争へ（Ⅰ）――帝国の戦争　42
四　ヨーロッパ戦争から世界戦争へ（Ⅱ）――非ヨーロッパの参入　46

むすびに代えて——世界戦争の現出　50

Ⅱ　諸民族の大戦経験

2　イギリス帝国とインド人兵士……石井美保　57
——「マーシャル・レイス」にとっての第一次世界大戦
はじめに　57
一　「スィパーヒーの反乱」の衝撃——一九世紀中葉以降のイギリスとインド軍　58
二　マーシャル・レイス理論とインド人兵士のリクルート　60
三　「理想の兵士＝臣民」としてのマーシャル・レイス　62
四　兵士たちを動かしたもの——名誉、アイデンティティ、忠誠心　64
五　西部戦線での従軍と兵士たちの苦悩　68
六　終戦以降のインド軍とナショナリズム　70
おわりに　72

3　ロシアとオスマン帝国における動員と強制移住……伊藤順二　79
はじめに　79
一　ロシアのドイツ人　81
二　開戦とドイツ系住民の排除　84
三　バルカン戦争とアルメニア人問題　87
四　オスマン帝国の参戦　92

おわりに　96

4　インド民族運動の転換……田辺明生　101

はじめに　101
一　グローバルな連鎖のなかの民族運動——大戦前の動き　104
二　大戦とインド政治　107
三　大戦後の民族運動　116
おわりに　118

Ⅲ　日本の参戦

5　第一次世界大戦初期の日本外交……奈良岡聰智　127
——参戦から二十一ヵ条要求まで

はじめに　127
一　参戦外交　128
二　ドイツ人捕虜と日本人抑留者　134
三　二十一ヵ条要求　139
おわりに　144

6　第一次世界大戦期日本における「戦後論」……ヤン・シュミット　155
——未来像の大量生産

はじめに——「期待の地平」と「経験の空間」　155

一　大戦景気と未来像　157
二　メディアと「期待の地平」の変容　158
三　「戦後論」の展開過程　161
四　「戦後の予断」――「戦後論」の事例分析（一）　164
五　『戦後の研究　百人一話』――「戦後論」の事例分析（二）　167
おわりに――「戦後論」の遺産とその政治性　172

Ⅳ　アジアへの波及

7　中国ナショナリズムと第一次世界大戦……小野寺史郎　181
はじめに　181
一　大戦の勃発と二十一カ条要求の影響　182
二　中華民国の参戦外交　187
三　「公理戦勝」とパリ講和会議、五四運動　194
おわりに　196

8　東南アジアにおける第一次世界大戦……早瀬晋三　211
――『南洋日日新聞』からみた大戦の影響
はじめに　211
一　各国・地域で発生した反乱　212
二　輸出用商品作物　220

三　南洋の日本人・日本製商品　226
おわりに　230

9　オスマン帝国と第一次世界大戦……鈴木　董　233
はじめに　233
一　オスマン帝国と「欧州」諸国――ハプスブルクとフランスと　235
二　新たな脅威と新たな友邦　239
三　領土喪失・改革・革命　242
四　諸戦争から大戦へ　246
五　大戦と帝国の運命　249

コラム

南アフリカと第一次世界大戦……堀内隆行 98
戦争イメージの「世界同時性」……ヤン・シュミット 148
自治民政雑誌『斯民』に見る大戦……黒岩康博 150
朝鮮における第一次世界大戦……李昇燁 152
アメリカ海軍と日本……布施将夫 202
西原借款——東アジア経済史から見た大戦……籠谷直人 204

〈シリーズ総説〉

世界戦争への道、そして「現代」の胎動

山室信一

はじめに――「奇異の時代」二〇世紀の幕開け

二〇世紀は、戦争と革命と原子爆弾の投下によって推計一億人に近い人が殺傷された人類史の上で未曽有の「大量殺害（メガキル）の世紀」であった。しかし、世紀初めに約一六億人であった世界人口が、世紀末にはおよそ六〇億人に達したことに着目すれば、人類史上で空前絶後になると思われる人口爆発を達成した「大量出生（メガバース）の世紀」でもあった。

こうした大量殺害と大量出生とが表裏一体となって進んだのが二〇世紀であり、後世の人々はこの世紀を中世以上の「暗黒」の時代だったと批判するかもしれないし、科学技術が飛躍的に発展して人口増大をもたらした人類史における「可能性の世紀」であったと讃えるかもしれない。あるいは惨禍と飛躍が併存した「闇と虹の世紀」と呼ぶこともありうるだろう。

それでは、新たな世紀を迎えた当時の人々にとって、その後につづく百年はいかなる時代になると予想されていたのであろうか。

二〇世紀初年となる一九〇一年一月二日と三日、『報知新聞』は二三項目におよぶ「二十世紀の予言」を掲げた。

そこでは「無線電信および電話」の発達によって世界中の人が直接に話せるようになる、地下鉄・高架鉄道が建設される、エアコンが実用化される、電気による食物栽培が可能となる、「写真電話」としてのテレビ電話が発達し買い物にも利用される、さらに東京―神戸間が高速鉄道によって二時間半で結ばれるなど、ほぼ的中しているものが少なくない。また、「遠距離の写真」という項目では、「数十年の後、欧洲の天に戦雲暗澹たることあらん時、東京の新聞記者は編輯局にいながら電気力によりてその状況を早取写真となすことを得べく、しかしてその写真は天然色を現象すべし」として、フルカラーの電送写真ないしカラーテレビにあたるものが予想されている。これが写真電送機を指すとすれば、一九〇六年にドイツとフランスで実用化し、日本には一九二四年に輸入されている。あるいはこれがテレビを意味するのなら、一九二六年に浜松高等工業学校の高柳健次郎がブラウン管テレビ受像機を開発、二八年にはスコットランドのJ・L・ベアードが世界初のカラーテレビの公開実験に成功している。英国放送協会(BBC)がテレビの実験放送を開始するのは一九二九年のことである。

ここにみられるように、第一次世界大戦の前後には現在の私たちの生活につながる様々な技術開発が進展しつつあったが、本論集にとって問題となるのは「数十年の後、欧洲の天に戦雲」たれこめるという予言がなされている点である。これは年数からすれば第二次世界大戦とみるべきであるとしても、早晩ヨーロッパで戦争が勃発することへの何らかの予兆が感じ取られていたとは言えるであろう。そして、第一次世界大戦が起きるや、電送ではなかったものの戦況を知らせる写真が速報性をもって世界各地に伝えられ、日本でもヨーロッパと共時的に動いているという認識がうまれることになる。この戦争を日本人がいち早く「世界戦争」「世界大戦」と呼んだのは、そうした情報の共時性が感得されたことも一因となっていたはずである。[1] そして、この「二十世紀の予言」でさらに注目すべきは、そこでの戦争形態として「チェッペリン式の空中船は大に発達して空中に軍艦漂(ただよ)い、空中に修羅場を現出すべく、従って空中に砲台浮ぶの奇観を呈するに至らん」として「空中軍艦、空中砲台」の出現が予測されていたことである。これ

は熱気球による有人飛行が一七八三年にフランスのモンゴルフィエ兄弟によって成功し、一九〇〇年にはドイツのツェッペリンが飛行船の実用化に着手していたことなどもあって、空中戦時代の到来が思い描かれたと思われる。その後、一九〇三年に有人飛行機の開発に成功したライト兄弟が軍事利用に販路を見いだし、ツェッペリンが一九〇九年にドイツ海軍に飛行船を納入するなど、空中戦の準備は進んでいった。そして、一九一一年一〇月、イタリア陸軍航空隊はリビアでオスマン帝国軍に爆弾を投下したが、これが世界初の空軍による地上爆撃となった。このイタリア・トルコ(伊土／トリポリ)戦争においてオスマン帝国軍の劣勢をみたバルカン諸国はバルカン同盟を結成して、一九一二年一〇月からのバルカン戦争へと突入し、それが第一次世界大戦へと繋がっていくことになる。ちなみに、バルカン戦争ではブルガリアが二二ポンド(約一〇キロ)爆弾を開発して本格的な都市爆撃をおこなっていた。

だが、一方でこうした飛行船や航空機の発達が空爆という事態をもたらすであろうことへの警戒をもって、人類は二〇世紀を迎えていたことにも留意しておく必要がある。すなわち、一八九九年に開かれた第一回ハーグ万国平和会議は、一般住民を殺傷する可能性が高い気球や飛行船からの爆弾投下を禁止する宣言を出していたのである。

このように「二十世紀の予言」においては、一方で人や情報の移動時間の短縮によって世界が一体化していく文明の発展に期待をかけながら、他方で飛行機などの発達によって戦争の悲惨さが増すことへの警戒も示されていた。おそらく、そうした双面性が思い描かれていたためであろうか、この予言記事は「二十世紀は奇異の時代なるべし」と結ばれていたのである。

それから一三年を経て、第一次世界大戦は起きた。その開戦からほぼ二カ月を経た段階で、新たな世界の到来を予期した石橋湛山(たんざん)は、次のように記している。

今回の戦争は人類をして彼が現在生活せる世界の構造・性質およびその世界を支配せる各種の主義・思想の当否・正邪を親切痛烈に理解し批判する前代未聞の大機会を供したるものなり。〔中略〕この戦争を転機として、や

がて人類の思想・政策に一大革命の期の来たるべきや、蓋し疑う余地無しと云わざるべからず。[2]

果たして、第一次世界大戦は、いかなる意味において「世界の構造・性質およびその世界を支配せる各種の主義・思想」などを根底的に問い直す人類史における革命性をもった戦争となったのであろうか。そして、その戦争は湛山が確信したように「人類が現在生活せる世界」における価値観や倫理観をはじめとする総体としてのあり方を、どのように理解し、批判し、転換していく契機となったのであろうか。

私たちは、そうした問いそのものを含めて、改めて「第一次世界大戦なるもの」を問い直す一歩をここに踏み出すこととなる。

一　本論集の課題

さて、これから四巻にわたって、第一次世界大戦のもった歴史的な意義とその現在性を二一世紀の日本という時空間から探っていくが、日本人にとって第一次世界大戦とは、遠いヨーロッパを戦場として繰り広げられた対岸の火事にすぎず、ほとんど意識にのぼることもない「忘れ去られた戦争」とみなされてきたことも否定できない。

そうした常識に従うかぎり、日本で第一次世界大戦研究をおこなうことは、単に欧米の学界の趨勢に追従することでしかないと思われるかもしれない。だが、長い間、そのように漠然と考えられてきた通念は本当に正鵠を得たものであったのか、日本や日本人にとって第一次世界大戦は遠く無縁な戦争であったと言えるのかどうか、について私たちは疑問をもっている。そして、その是非を日本に焦点をあてるだけでなく、アジアを視野に入れることによって明らかにしたいと期してきた。その問いに答えることは、取りも直さず、これまで自明視されてきた第一次世界大戦は「ヨーロッパ大戦」にすぎないという見方に対して「ヨーロッパの外から見た大戦」を対置し、それによって第一次

世界大戦のもった「世界性」の意義を改めて問い直すことに直結すると思われるからである。

しかしながら、それは議論を「日本とアジアにおける第一次世界大戦」という問題に限定するということを意味するものではない。ましてや、ユーロセントリズム史観を日本中心主義史観やアジア中心主義史観に置き換えようとするものでもない。私たちが志向しているのは、第一次世界大戦を日本とアジア、ヨーロッパ、アメリカそしてイスラーム世界やアフリカといった空間範域間の相互交渉過程のなかで捉えたいということなのである。なるほど、収められた論説やコラムのテーマだけを御覧になれば、日本やアジアというモチーフは後景に退き、欧米の研究者と同じ目線に立って研究テーマを選択し、議論を重ねているものが多いという印象を抱かれるかもしれない。だが、明言しないにせよ、近代以降の欧米をテーマとすることは日本との連関性を抜きにして論じられない、ということを私たちは七年におよぶ京都大学人文科学研究所における共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」の研究会において確認してきている。もちろん、研究対象を同じくする限りでは、欧米の学界にも寄与できるだけの成果を提示する責務から免れることはできない。他方、欧米のみならず中国、南米、アフリカなどの研究者との交流をおこなうなかでしばしば伝えられる要求は、日本から第一次世界大戦やそれを契機とした世界の転換の位相はどのように見えるのかを知りたいというものであり、本論集によって私たちはこの要請に応え、さらに海外の読者に向けても成果を発信する準備を進めている。

近年では、欧米の学界においても第一次世界大戦をヨーロッパ戦争とだけ捉える見方に対して異論が唱えられ、グローバルな、あるいはトランスナショナルな戦争としての側面に着目する必要があるとして、世界的な研究交流体制を組織する動きに拍車がかかってきている。すでに二〇〇一年以降、第一次世界大戦学会(International Society for First World War Studies)が継続的に国際会議を開催し、第一次大戦学は一つの研究分野として確立されつつある。また、ベルリン自由大学などを中心として世界各国の研究者を組織して第一次世界大戦に関するオンライン総合事典

を作る作業が着々と進行しており、私たちもその一環を担っている。

こうした国際的な研究交流が進むなかで、私たちは第一次世界大戦を経験した日本において、戦争と平和に対するスタンスという問題だけではなく、政治や経済をはじめとして文学・芸術・学知さらには生活世界などのありようが総体としてどのような衝撃をうけ、それが現在に至るまでいかに持続しているのか、を明らかにすることを期してきた。総力戦という様相を時間の経過とともに強めていった第一次世界大戦は、それが総力戦化という、まさにその途上のプロセスにおいて人間のあらゆる活動に影響をあたえざるをえなかったからである。だがしかし、あらゆる問題を第一次世界大戦の衝撃に還元して捉えることは、また違った新たな偏見を生むことになる。第一次世界大戦以前に既に生じ、それが第一次世界大戦を経ることによって加速されただけの変化もあったかもしれないし、あるいは大戦の時期に単なる並行現象として起きたにすぎない変化があったかもしれないからである。そうした因果関係や影響関係を見きわめるために、私たちは「世界性」とともに、「総体性」と「持続性(現代性)」という基軸をもって、それぞれの研究対象に迫ることを自らに課してきた。もちろん、「世界性」「総体性」「持続性(現代性)」という三つの基軸をもって対象に向き合うということは、すべてをそれに当てはめるという意味ではない。第一次世界大戦には、未だ世界性がない、総体性に欠ける、現代性は大戦以前に始まっていた、といった結論に導かれる対象や分野もあるかもしれない。その意味で三つの基軸は、リトマス試験紙ないしは分光器といった機能をもつ引照基準(フレーム・オブ・レファランス)として設定されるのであって、結論そのものを拘束するものでは決してない。

こうして第一次世界大戦前後の世界を共通の分析対象としながら、それぞれのテーマに即して仮説と結論を結ぶ論証のプロセスを示すことが、本論集の課題となる。そのため「世界性」「総体性」「持続性(現代性)」の理解についても、それぞれの論説やコラムにおいて多彩なグラデーション(階調)を示すはずであり、一つの見方だけで律することはできない。

そのことを前提にしたうえで、先ずは第一次世界大戦とはいかなる戦争であったのかについて概観し、そのなかで「世界性」「総体性」「持続性(現代性)」という概念によってどのような問題を考えようとしているのかについても触れておきたい。

二　「第一次世界大戦」とはいかなる戦争か

大戦の「世界性」をめぐって

私たち日本人が第一次世界大戦と呼び習わしている戦争は、イギリスでは今日においても定冠詞つきで「The Great War(大戦争)」と呼ばれる。日本やアジアそしてアメリカなどからみれば、第一次世界大戦よりは第二次世界大戦の方が遥かに甚大な惨害を生んだ「大戦争」と思われがちだが、イギリスでは必ずしもそうではない。その理由の一端は、二つの大戦の犠牲者数からも知ることができる。すなわち、当時帝国としてあったイギリスは本国(UK)で七五万人、自治領で一六万人、インドで七万人の軍人の戦死者を出し、さらに二九万人もの民間人が犠牲となっている。その数は、第二次世界大戦における戦死者数の五倍を越える。同様に、フランスにおいても第一次世界大戦では軍人一四〇万人・民間人五〇万人におよぶ戦死者が出たが、これも第二次世界大戦における軍人二二万人・民間人三五万人という数値の三倍に近い。これらの数に比べると、日本の第一次世界大戦の戦死者数はシベリア戦争を含めて五〇〇〇人未満とされており、これは大まかにいえば日清戦争の三分の一、日露戦争の一八分の一、満洲事変から一九四五年までの戦争の四八三分の一に相当し、近代日本の戦史のなかで犠牲者数は相対的に少なかった。(3)

こうした第一次世界大戦における犠牲者数の膨大さは、連合国側でもイギリスやフランスの他、ロシアでは軍人二〇〇万人・民間人一〇〇万人(革命期の戦争を入れれば民間人は五〇〇万人)に及び、一九一七年に参戦したアメリカでも

一二万人の戦死者を出している。他方、同盟国側もドイツで軍人二〇五万人・民間人は六〇万人から八〇万人、オーストリア＝ハンガリー（以下、オーストリア）で軍人一一〇万人・民間人二三万人に達している。この他、オスマン帝国やブルガリアなどの参戦国もまた多大な犠牲者を出すなど、第一次世界大戦が人類史上で最初の大量殺戮戦争となったことは間違いない。そのことが一世紀にわたって様々なトラウマを世界の人々に強いてきたことは、各地の戦没者墓地や記念碑などに見ることができる。

さらに、概数でしか示せないが、インド一五〇万人、インドシナ五万人、アフリカ一〇〇万人などの人々が兵士として、また中国から二五万人近くが労働者として動員されたし、各地から義勇兵として個人で参戦した人など、参戦者は世界規模に広がった。イギリス軍の場合、四人に一人以上が本国以外の帝国臣民によって占められていた。自治領や植民地が存在し、戦場外からの人的・物的な補給を強要できたことによって第一次世界大戦は長期持続戦となりえたし、逆に海上封鎖をされれば生活必需品や食糧が欠乏して飢餓状態が生まれることにもなった。

このように開戦前に欧・米・日などの帝国によって世界が分割されながら、しかし同時に宗主国と植民地の一体化が進んでいたがゆえに、植民地の人々は独立や自治をめざすなどの思惑を抱きつつ戦争に巻きこまれざるをえなかったのである。世界が空間的距たりがあるにもかかわらず相互の結びつきを強め、一体化して動くようになっていたために戦争は世界化した。そうして世界化した戦争が、敵情を知る必要などによって敵対という関係によってさえ相互の認識を深め、ますます世界を一体化させていった――この相乗効果のメカニズムを生みだしたのが、第一次世界大戦であった。そして、この一体化は戦後においても進み、戦争によって生じた大量の生産人口の減少を移民による労働力で補塡する対応を取ったことが、ヨーロッパにおける今日の移民問題にもつながっている。私たちが「世界性」として着目しているのは、まさにこのようなメカニズムそのものであり、単に戦場が世界に広がったということや、自治領や植民地から人々が参戦したということにとどまらない。「世界性」とは第一次世界大戦で顕在化した世界的

連動性を解明し、それによって「近代」とは異なった「現代」に特有な現象として生じた事象とは何かを解明していくために設定した分析視角に他ならないのである。

加えて、第一次世界大戦によって生まれた「世界性」を考えるにあたって忘れてはならないのは、国境を越える捕虜や難民の問題である。この戦争で生まれた捕虜は九〇〇万人におよぶといわれ、その人々は捕虜となったことによって一面で自国の戦力や生産力を低下させることになるが、他面で敵国の食糧物資などを消費してダメージを与えることにもなる。しかし、同時に捕虜収容所などにおいて労働奉仕や生産作業を担ったことによって、敵国の戦争維持を下支えして自国に打撃を与えるという逆説的な機能を果たすことにもなった。ここには自らの国家による保護を失って敵国の管理下に置かれ、敵国の戦争継続を支えることで生命を保つしかない人々を大量に生み出すことで民族や国境などの境界を掘り崩していった第一次世界大戦の特質を見いだすことができる。鳥瞰的に見れば、ユーラシア大陸とその両端にあるイギリスと日本の列島は、国境線を越えて「捕虜収容所群島」とでも称すべき空間を生み出していたのである。さらにその広大な空間範域の中には、国家に対して恒常的な帰属感をもつことのできないユダヤ系あるいはロマ系の人々や自ら国籍を脱した義勇兵などが混在していた。そうした人々の存在が戦争遂行にあたって時に利用され、時に障害とみなされては、抹殺や追放の対象となるのも総力戦のもつ特質であった。そして、「敵性民族」の排除のみならず、都市や商品などの名前から敵国の言葉が消されていくことにもなった。

これに関連して現時点に至るまで大きな軋轢を引き起こしている問題として、アルメニア人虐殺問題がある。この問題は同盟国として参戦したオスマン帝国が、領内のアルメニア人が連合国側のロシアにつく策動をしたとして一九一五年から「反乱鎮圧」をおこなったもので、アルメニア人は一五〇万人が組織的に殺戮された「民族虐殺（ジェノサイド）」であったと主張している。これに対し、オスマン帝国の後継国家であるトルコ共和国では三〇万人から五〇万人の死者が出たことは認めるものの、大戦下にやむを得ず起きた悲劇であるとしてオスマン側が被った残虐行為をむしろ問題にし

ている。そして、二〇〇六年一〇月にアルメニア人が多数居住するフランスにおいて、この殺害を「ジェノサイド」と認めない者を処罰する法案が可決されたことや、二〇〇七年にアメリカ下院外交委員会が虐殺問題としてトルコを非難したことなどによって、相互の溝が深まる事態が生じた。このような戦時における大量虐殺問題は、第二次世界大戦時に起きた「カティンの森」事件や南京事件などと同じく事実認定が困難なこともあって、被害側と加害側との歴史認識をめぐる対立が新たな紛議を生み出す点で「持続性(現代性)」をもつ課題となっている。

「見えない戦争」の「総体性」と「持続性(現代性)」

こうした問題と並んで考慮しなければならないのは、第一次世界大戦の悲惨さを際立たせ、それが集合的記憶となってきたのは犠牲者の数の膨大さにだけよっているのではない、という点である。確かに、第一次世界大戦の特質が、殺傷者数や砲弾などの武器使用の数の膨大さという大量性にあることは間違いない。だが同時に、戦争が個人の肉体を殺傷したというだけではなく、空間感覚や時間認識などを含めた心身のあらゆる次元に衝撃を与えたという質の側面も考慮に入れる必要がある。私たちが「総体性」に注目するのは、まさに「量」と「質」の問題を分離することなく、複眼的に関連させながらみていきたいと考えているからである。

それでは第一次世界大戦で起きた空間感覚や時間認識などに対する衝撃とは、いかなる事態であったのだろうか。まず注意をむける必要があるのは、空中から飛行船や航空機によって、あるいは海中から潜水艦によって爆撃を受けるなど、地平線や水平線の上下に広がる戦闘が出現したことである。そこでは戦争空間が、二次元の面から三次元の立体へ拡張するという重要な転換が生じていた。

地上戦においては、塹壕戦となったことで、それまでの戦闘とは異なり、地表面下に身を隠して相互に姿を見せず、見えない敵と戦うという戦闘を強いられることになった。兵士たちにとっては、ひたすら塹壕という地表下に身を潜